

スコットランド歴史学派におけるヒューム

大野 精三郎

1 主題とその意味

本稿は、その学問・著作活動が多方面にわたるところから従来さまざまな問題視角から研究され、相異なる評価をくだされてきたヒューム¹⁾をスコットランド歴史学派の共通の課題と方法のなかにおき、かれのこの学派における地位と貢献とを明らかにすることにある。そしてあわせて、その観点から、古典派政治経済学の成立に果たしたかれの役割と意義とを明らかにすることにある。このことは安易に推測されるように、その大著『イギリス史』の著者としてのヒューム、すなわち歴史家としてのかれを問題としてとりあげ、認識論者、道徳哲学者、宗教哲学者、経済学者としてのかれにさらに歴史家としての1側面をつけ加えることを意味するのではない。また従来試みられたように²⁾ ヒュームの『哲学』と『歴史』との関連を問題とするのでもない。のちに明らかになるように、むしろ逆にヒュームのすべての著作の底に流れている理論的基礎を明らかにすることによって、かれの著作の総体把握を可能にするような統一的視点を提供することを意味する。この主題の意味はかれをその有力な先駆者とする『スコットランド歴史学派』の課題と方法とを明らかにすることによって明らかとなるであろう。

1) ヒューム(David Hume, 1711-76.)の著作のうち本稿において引用されるものをあらかじめ掲げておくことが便宜であろう。

A treatise of human nature, being an attempt to introduce the experimental method of reasoning into moral subjects. 1739-40. 大槻春彦訳『人性論』4巻(岩波文庫1948—52。)

Political discourses. 1752. そのうちの一部は邦訳されている。小松茂夫訳『市民の国について』1952。筆者は、*The philosophical works of David Hume.* 4 vols., Boston, 1864. をテキストとして用い、『論集』からの引用のばあいは論文名をとくに掲げることにした。

この学派の方法的基礎は18世紀初頭以来のイギリスの経験論の伝統に負うものであった。すなわち神学的人間観や人間的事象を単に理性の作用とみる主知主義的見解に対して現世的な人間の経験主義的=感情を主軸とみる見解から出発している。またこのような現世的な人間は、歴史のはじまりから群居生活を営んでいたという事実が認識されはじめ、それが経験論的見地から、新たに研究されるに至った。すなわち、人間の行為の動機や道徳的感情や習慣、感覚などを新らしく分析する人間研究に立脚して、社会発展を明らかにすることがこの学派の課題となったのである。この学派に共通することは、社会および社会的変化は本質的に理性の所産であるとする見解、すなわち社会およびその諸制度は人間の計画や予見の、いわば理性の所産であるとする同じ世紀に支配的であった主知主義または合理主義の見解に反対し、その現世的な人間研究に立脚して、社会およびその諸制度は、人間の直接の欲望や目の不便をとりのぞく動きの産物であり、そこには個人や国家によって制御できないそれ自身の発展法則があると考えられた。そして社会の発展を、この経験論のうえで説明すること、すなわち、この社会的発展の全過程と全状況とをそれを支える要因に分析することによって社会の進化の法則を明らかにしようとしたのである。いいかえれば社会をその発展の全体性において捉えることがこの学派の課題となったのである。

スコットランド歴史学派の方法と課題を以上の

2) たとえば歴史家、マイネッケ(F. Meinecke)によってヒュームの歴史観の最もすぐれた研究と賞揚されたGoldstein, *Die empiristische Geschichtsauffassung Humes.* 1897. も、おもにヒュームの認識論哲学と『イギリス史』との関連を問題にしているにすぎない。

ようにみえてくると、ヒュームの著作の関連もまた明らかとなってくる。現代に至ってはじめてかれの最大の業績と認識された『人性論』は、この学派の方法的基礎を提供することにあつた。かれの目的は合理主義的哲学を批判し、人性の諸原理を経験論的哲学のうえに、すなわち『殆んど全く新しい根底のうえに築くこと』を意図しているからである。そのなかでかれは因果関係を、理性によって推論されるものではなく、まったく経験から導かれることを主張し、経験の集積である習慣の役割を強調した。そして人間活動の諸源泉を分析し、理性のみをもってしては人間の意欲を生起させることも、いかなる行動を産むこともできないことを明らかにし、ついで、行動の諸源泉は人間の感情、つまり情緒(passion)であり、これが快をもとめ、苦を避けることによって意欲と行動を生むことを明らかにしたのである。そして『人性論』の最後の部分は、このような人性についての諸原理にもとづいて社会の発展を説明することにあてられた。この問題は、さらにのちの『政治論集』に発展させられている。かれが社会の起源と基礎にたいして関心をもち、社会契約というような思弁的仮構について考察・批判し、現実的進化論をもってこれに代えようと努力した。そして政治的社会は家族共同体または部族から次第に発生しきたったものであることを明らかにし、国家は社会生活の法的規制、すなわち人間が社会で生活することから得る利益を保持するためから生まれることを解明した。これらの現実的進化論と政治史をイギリスの歴史において明らかにすることが晩年のかれの『イギリス史』の課題となったのである。ところで、スコットランド歴史学派は以上簡単に述べたところから明らかのように、その成立以来ひとつの課題をもっていた。もし人間が、蟻や蜂のように集団的生活を営んでいるとすれば(この学派の先駆者であるシャフツベリーの表現)、その進歩はなにによって説明されるべきかという問題である。われわれは、ヒュームの現実的進化論の基礎をその個々の著作にあらわれているこの問題にたいするかれの思想を総括し、この学派にたいするかれの貢献を明らかならしめたい。

現代のわれわれからすれば、その問いには、人間の労働という人間に固有な特殊な、しかも歴史的・社会的・自由な実践行為によって、人間社会に特有な進歩が可能になったと答えることができよう。人間労働の本質は一言をもっておおえばその対象化にあると答えることができよう。この回答にヒュームはどれだけ近づいていたか、またどこにかれの理論の欠陥があつたか、総じてヒュームの現実的進化論の基礎をなす労働把握が本稿の問題となるのである。

II 人間的自由の表現としての労働

人間は他の動物のように外的世界の直接性に任せるのとちがって、この状況を自分自身で『媒介』することによって、はじめてこの世界を自分自身のものとしなければならない。媒介のこの過程は固有の意味での『生産および再生産』とよばれるものである。そしてこれが人間における労働の本来的在り方を示すものである。ヒュームはのちにみるように、その内容において、文化的・物質的労働を対象としてとりあげながら、その一般的な労働規定には到達していない。かれはわずかに物質的生産における人間労働についてつぎのように述べているに止まる。『人間には、必要によってあらゆるばあいかれの最大の技術(art)とインダストリー(industry)を使う高貴な能力が与えられている点で、他の動物と明確な、しかも実質的な相違がある……インダストリーは活動的であり、しかも知的行為である。粗野の未完成の材料を加工し、人間の使用と便宜にふさわしいようにするのである』³⁾と。ヒュームの貢献は、このような労働が外的世界の直接性を揚棄するかぎり特殊な人間的自由の現実的表現であることを強調した点にある。かれは人間活動の主要動因に快苦をおいたが、人間の活動は単に快を求める欲望としてみることはできず、活動それ自体を求める願望としての労働が、この人間的自由の表現であること、かれの用語法に従えば、活動の意欲(the desire for action)が人間に固有な性質であることを明らかにした。そしてこのことが『人性論』における

3) "The Stoic," in Vol. III, P. 159.

文化的活動としての学問活動から『論集』における物質的労働としての経済活動に至るまで一貫していることを強調した点にヒュームの功績がある。ヒュームが捉えたこの関連を明確に、しかもはじめてとりあげたのはロートワイン教授⁴⁾の功績である。われわれも暫らく教授に従ってヒュームの分析をみておこう。

ヒュームによれば、学問活動からひきだされる快は根本的には、妥当な知識それ自体の獲得にあるのではなく、心の活動に、換言すれば『真理の発見ないし理解にさいして用いられる天稟および知性を行使することのなかにある』⁵⁾。そしてこのような真理の追求がみたされるためには、2つの条件が必要である。第1に、その企てがわれわれの能力に真の挑戦を提起するものでなければならない。『容易で分明なものは、けっして価値ありとされない。……われわれは数学者の論証をあとづけることを愛する。だが、線や角の割合を単に告げるだけの人物からは、たとえ該人物の判断と真正さとに全幅の信頼をおくにせよ、僅かな愉悦をうけるに止まるであろう。このばあいには真理を学ぶには耳さえあれば足り、注意を固定しあるいは天稟を発動させるには及ばない』⁶⁾。第2に、心的活動がおこなわれるためには真理がいくらか効用をもたなければならない。『代数学の問題を無限に重複することは容易である。また円錐曲線の割合を発見することには終末がない。しかも、これらの探求に快感を感じて、いっそう有用かつ重要なものへ思惟をむけないような数学者はまずいものである。』⁷⁾ だが真理が有用でなければならないと主張することはまえに述べたことと矛盾するように思われる。というのはヒュームにおい

ては、ここでは活動の快は、活動が価値ある目的にむけられることが必要であると主張されているのに、まえのところではこの情緒の真の目的として働くのは、この目的ではなく単に活動それ自体であると述べられているからである。しかしこの矛盾はつぎのこと、すなわち『われわれが不用意・不注意であるときは、同じ知性活動も心になんらの効果も及ぼさないし、また他の性向にあるとき(すなわち注意深く専念しているとき)の該知性活動からおこる満足を少しも伝えることができない』⁸⁾ ということをも心に留めれば解決することができよう。換言すれば、真理の重要性が快の完成に必要なとしても、それはわれわれの快楽感にいちぢるしい追加物をもたらすがためではなく、ただわれわれの注意を固定するうえにある程度まで必要であるというだけである。目的の有用性または重要性ということは、ヒュームにあっては目的と効用とがかすかに結びついていることだけで生ずる情緒の影像(image)以上に出ない欲望または傾性に属しており、真理の重要性と結びつくこの関心の唯一の機能は、『ある目的に注意を固定するためにほんのわずかの関心を提供することだけである』⁹⁾ ということになる。換言すれば学問活動のうえでの真理の重要性は学問を行う目的をなすものではなく、研究者の注意を固定させる意味をもつに過ぎない。いいかえれば真理の価値は学問活動にとって手段としての意義をもつにすぎない。あるいはもっと適切には、知性にあらわれる欲望を満足させるための手段目的(instrumental end)としての意義をもつにすぎないといっていよう。ヒュームはさらに進んで知識の追求の意味を拡げて狩猟・勝負事におよぼしている。

『明らかに狩猟の快は心身の活動に存する。換言すれば狩猟に当たっての運動や注意や困難や不確かさに存する。また等しく明らかに、これらの活動は心になんらかの効果を及ぼすために(実際上の問題は別として少くとも想像において)効用の観念を伴わなければならない。これらは哲学的探求と同じである。……さてここで確しかに効用な

3) "The Stoic", in Vol. III, p. 159.

4) E. Rowtwein, *David Hume, writings on economics*. 1955. およびロートワイン教授の見解をヒュームの経済理論についての基礎見解とみる田中敏弘「デイヴィッド・ヒュームの経済理論—そのライト・モチーフとしての」『経済学論究』第12巻2号1954。

5) *Treatise*, in Vol. II, p. 208. 邦訳第3分冊252ページ。

6) *Treatise*, p. 205-6. 邦訳第3分冊250ページ。

7) *Treatise*, p. 206-7. 邦訳第3分冊251ページ。

8), 9) *Treatise*, p. 208. 邦訳第3分冊252ページ。

いし重要性それ自身は真の情緒をひきおこさなくて、ただ想像を支持するに必要なだけである。そこでこの人物は狩猟以外の主題であげることのできる十倍の利得を看過しながら、この同じ人物が数時間の狩猟ののち半ダースの山鳴や千鳥を獲てよろこんで家にもち帰るのである。』¹⁰⁾勝負事との類似性についてヒュームはつぎのように述べている。『勝負事の快感は利害のみから起らない。なぜなら多くの人がこの快樂のために間違いない儲けを捨てるからである。しかしまた勝負事はそれからだけでも来ない。なぜなら(確実な儲けを捨てる)同じ人物が、なにも賭けないときは満足しないからである。勝負事の快感はこのいずれでもなくて、これら2つの原因の合一から生ずるのである。』¹¹⁾これらの学問活動・狩猟・勝負事にみられる活動欲という情緒は、経済活動においても同じく作用しているとヒュームは主張する。経済活動が第1に困難や障碍を意識的に克服する行為であることについてはヒュームが、労働を狩猟にたとえているつぎのことから明らかであろう。

『かれら(狩猟家たちは)自分の家や近くの平原にいるあらゆる種類の動物には、その肉が最も美味なごちそうになり進んで致命的な一撃をうけようとしているときには捨てて顧みない。狩猟家たちと同じように労働する人間はきわめて簡単に手に入れることを控えている。かれは自らの目や手からのがれ、かれの攻撃を防ぐ獲物を求めている。』¹²⁾第2に、ヒュームは、経済活動の対象では富を求める願望が富の消費からひきだされる快感を求める真の情緒であることに反対し、富はここではうえに述べた『山鳴や千鳥』の意味をもっていると指摘する。『人間の心には、力をだすことや使ってみることへの傾性や願望よりほかに、永続きしまたみたされることがないものはない。この欲求はわれわれの情緒と仕事の大部分の基礎をなしているように思われる。』¹³⁾経済活動において追求される富は、それを消費することによってひきださ

れる快感を与えるという直接的な影響力を超えて、まさに間接に学問活動における目的と同じように手段目的としてあらわれ、経済活動を活動欲のふさわしい担い手とする。この基礎から経済活動に特有な欲望である貪欲(*avarice*)または利潤にたいする欲望(*the desire for gain*)があらわれる。利潤欲はヒュームにあっては貨幣保蔵欲と理解される一面をもっているが、しかしその根本的動機は、この関連でいえば活動欲であると指摘すべきである。『ひとにかれの精神と肉体とをもっと害のない使い方を教えよ。そうすればかれは満足し、もはや快のうちにかぎりない渴きを感じなくなるのであろう。しかしあなたがかれに与える仕事は儲け仕事であるならば、とくにその利益がそれぞれの特殊なインダストリーの行使にとまなうものならば、かれはしばしば利益を眼中におき、漸次それにたいする情緒をいだくに至り、かれの財産が日々に殖えてゆくのをみる快がわからなくなるのである』¹⁴⁾と。かくて、活動欲においては、表面上の目的はひとつの情緒の『影像』にすぎなかったが、『情念の自然的経過』のうちに利潤の獲得を成功裡に完成する行動の印としてみる興味が発展し、独自の動機に転化してゆくのである。この点についてヒュームはつぎのように述べている。『この項目に関して私は多くの折に有用であるかも知れないひとつの一般的な注意をしよう。すなわち、心が情緒をいだいてある目的を追求するとき、該情緒は根源的には該目的から来ずに単に、行動ないし追求から来るだけであっても、それにもかかわらず、情念の自然的経過はわれわれをして目的それ自身にたいする憂慮の念をいだかせ、目的の追求に当って失望させられることがあれば、われわれは不快になるのである。』¹⁵⁾

このように経済活動にみられる活動と快とは、ヒュームによれば、生気の願望(*The desire for liveliness*)がみたされるときさらに増大する。生気感覚は、活動と快とによって人間の欲望がみたされるとき生ずる生気感覚を意味するだけではない。『睡眠』または『無情緒』にたとえられる

10), 11) *Treatise*, p. 208-9. 邦訳第3分冊 253 ページ。

12) "The Stoic", in Vol. III, p. 162.

13), 14) "Of interest", in Vol. III, p. 330-1

15) *Treatise*, p. 208. 邦訳第3分冊 253 ページ。

『怠惰』(indolence)と対照するとき、この感覚は本来情緒が活動する状態に特有な感情的刺げき、すなわち、精神の迅速な動き(The quick march of spirits)を意味する。この願望の原型も『人性論』において与えられている。『一体人性を罵倒して快を感じる人々のこれまで言ってきたところであるが、人間は〔自分ひとりで〕自己を支持するに不充分であり、従って今擱っている外的事物の抛りどころをすべて失えば、最も深い憂鬱と絶望に落ち込むのである。そしてかれら〔人性を罵倒する者〕のいうところでは、ここからして勝負事や狩猟や仕事に〔絶えず〕続いて楽しみを求める例のことが生ずるのである。けだし、これによってわれわれは自己を忘却しようとする、活潑な生氣ある情感がささえてくれないときに落ちこむ精神の萎縮した状態からわれわれの精神を興奮させようとするのである。……これらの事物があらわれると心はいわば夢から醒める。血は新たに脈々と流れ、心臓は高鳴るのである』¹⁶⁾と。そして経済活動は単に欲望充足の願望をふくむだけでなく、利潤追求や所有欲望をふくむようになるとそれらの情緒をみたすことが、ひとつの情緒すなわち生氣の願望の対象となることを反映するのである。すなわち利潤追求の動機が加わってくると、快にたいする願望を減少させ、節約心を生み、かくて利潤への愛好が快の愛好より優勢になってくるのである。

ロートワイン教授に従ってヒュームの分析をみてきたわれわれは、ヒュームのつぎの結論を理解することが容易となろう。『インダストリーと技術の繁栄する時代には、ひとびとは絶えず仕事に従事し、かれらの報酬としての労働の成果である快のみならず、仕事自体を報酬として享受するのである。精神は新しい活力を獲てその能力を拡大し、真面目な勤労と勤勉とにおいてみずからの欲望をみたすとともに、不自然な欲望の成長を阻止するのである。』¹⁷⁾

I 社会的実践としての労働把握

ところで人間に固有な実践としての労働は、人

間の類的生活の対象化である。というのは労働において孤立した個人が活動しているのでもなければ、労働の対象性は孤立した個人による対象性でもなければ、また単なる個人の集合による対象性でもなく、労働において特殊な・人間的な普遍性の実現されているからである。対象化は本質的に社会的活動である。このことをヒュームは『人性論』における同感の原理を媒介として明らかにしている。

ヒュームによれば人間は『宇宙の生物のうちで社会をつくる最も熱烈な欲望をもつものであり、また社会によって最も多くの利益を得るところからそれに適したものである。われわれ人間は社会と関連のないかなる願望をいだくことができない。』¹⁸⁾このような人間と社会とを結びつける人間の性向、または原理は同感(sympathy)であり、それは、ヒュームにおいて交感伝達(communication)として考察されている。『われわれは——とヒュームはいう——他人の心的傾向や心持がわれわれ自身のそれといかほど異っていても、いや反対であってさえも、それら他人の心的傾性や心持を交感伝達によって受けとる性癖』¹⁹⁾をもっている。そして他のところでは、つぎのように述べている。『およそ人間の精神はきわめて密接に対応している。それゆえある人物が私に近づくや否や前者の考えは私の心に弥漫して私の判断を大なり小なりひきずるのである。』²⁰⁾『2つの絃を等しくすると1つの絃の運動は共鳴によって残りの絃に伝達される。』²¹⁾以上明らかのようにこれは『強力な・心に喰い込む原理』である。その結果『人間の心は互いに鏡である』²²⁾ことになる。そして人間のあいだでの一般的類似について述べたところで、この同感の原理によって人間の社会性を明確に認識している。『類似は、われわれを他人の心持のうちに入らせ、これを〔自己の心持として〕輕易かつ快感をもって抱かせるうえに、換言

18) *Treatise*, p. 105-6. 邦訳第3分冊133ページ。

19) *Treatise*, p. 52. 邦訳第3分冊69ページ。

20) *Treatise*, p. 374-5. 邦訳第4分冊209ページ。

21) *Treatise*, p. 355. 邦訳第4分冊185-6ページ。

22) *Treatise*, p. 108. 邦訳第3分冊136ページ。

16) *Treatise*, p. 93-4. 邦訳第3分冊118-9ページ。

17) "Of refinements in the art", in Vol. III, p. 296.

すれば他人の心持に共感させるうえに、すこぶる多く貢献するにちがいない。……従ってわれわれは見いだすのであるが、人性の一般的類似に加えて、われわれの挙止や性質やさらに国土や言語に特異な相似があるとき、この相似は共感を促進するのである。けだしわれわれ自身とある事物との関係が強ければ強いほど想像は容易に推移し、われわれ自身の人物について観念をつくるとき、つねにともなうような想念の活気を、相関観念に伝えるのである。』²³⁾このような人間の社会性の意識はアメリカの社会学者ギディングズ(F. H. Giddings)によって類の意識(The consciousness of kind)の理論とよばれているが、ヒュームは、この原理に支えられて、労働の社会性の把握に近づいている。すなわち『ひとびとが相互に依存していることは非常に大きく、いかなる人間の活動もそれ自身で完結することはほとんどないし、その活動を神の意思に完全に答えるために必要とされている他人の活動にある関連なくして遂行されることはない』²⁴⁾と。自利心を経済活動の桿杆と考え、個人は諸欲望の総体であり、そして個人は他人のために相互に手段となるかぎりで定住するにすぎないとする当時の一般的見解のなかで、ヒュームが人間の活動を社会性において捉えることができたのは同感の原理に支えられているからである。

IV 歴史的実践としての労働

人間の労働はまた歴史的な実践としてあらわれる。対象世界の過去を現在において揚棄するところに現実の人間と外的世界との関係が成立するからである。労働はその歴史性において、はじめてそれが固有の意味での『生産および再生産』としての意義を獲得する。ヒュームは歴史的実践としての労働そのものを把握することができなかったが、政治論のあるところで歴史の継続性について述べていることは、それを示唆するとみてよいであろう。『蚕や蝶のように人間がもしも突然世代の交替をやり、その結果、新種族が自分の政府を

選ぶのに十分な分別をもつことになるならば——人類にはけっして起りえないことであるが——先祖の時代には支配的であった法律や先例などにはおかまいなしに、自分たち自身の政体を自発的ないしすべての同意により樹立することになるであろう。しかし人間社会はたえまない流転のうちにあり、この世から去るものもあれば、この世に入るものもあるという状態であるから、政府の安定性を保つためには、新来の世代が既定の政治組織に順応し、父祖の世代がそのまた父祖の世代の足跡を継ぐことによって、かれら新来の世代にしるしづけてくれた道に大体従うことが必要となるのである』²⁵⁾と。また『1世代の生活様式をなすものはなんであれ、次の世代もまた同じ色に深く染まらざるをえない』と。習慣を経験の集積と理解するならば、この引用句は人間社会の進歩の基礎を示したものとみられるであろう。

V 結 び

以上われわれは『人性論』以来の著作の各所に散在しているヒュームの見解をとりまとめ、かれの基礎理論、すなわちかれの現実的進化論を可能にした人間労働の把握を明らかにした。かれは労働を対象として明確に捉えてはいないが、それはともかくも、それを人間に固有な実践行為として総体的に把握し、その社会性および歴史性を不十分ながら明らかにした。いいかえれば、労働を科学的活動から経済活動としての物質的労働に至るまで総体的に把握した。そしてこの観点にたって人間社会の進歩を現実的に説明することができたのである。『インダストリー、知識および人間愛(humanity)は解けがたい鎖によって結ばれている。そして経験からも、また推理からも、このことはますます洗練された、そしてますます奢侈的な時代に通常支配的なものに特有なものであるとみられるのである』²⁶⁾

労働の3つの契機、すなわち社会的・歴史的・自由な実践としての契機のうち、ヒュームは最後

23) *Treatise*, p. 53-4. 邦訳第3分冊71ページ。

24) "Of liberty and necessity", in Vol. IV, p. 100-1.

25) "Of the original contract" in Vol. III, p. 506. 邦訳139ページ

26) "Of refinements in the arts" in Vol. III, p. 297-8.

の契機を明確に捉え、労働を人間の本質として、すなわち自由な実践として捉えることに成功した。そして経済活動を利潤追求という外見にとらわれず、このような人間活動のあらわれとして、いいかえれば、労働一般の転化形態として捉えることができたのである。そればかりでない。かれは、上述の引用からでも明らかのようにこのような経済活動が社会の進歩の土台をなしているという認識にまで進んでいる。

この認識は重商主義者の労働観の批判を可能にしたばかりでなく、のちのスコットランド歴史学派の発展への道を開くことになった。すなわち労働を人間に固有な意欲の表現として捉えたヒュームは、人間は生れつき経済活動に適さないのをこれを強制収容所(workhouse)に收容し強制による習慣によって労働への性向をつくりだすべきだとする重商主義者たちの見解を批判した。また重商主義者たちの指摘する『貧民の怠惰(The idleness of the poor)』についても、それは低賃銀によって、貧民の労働への意欲が妨げられることから仕事への生気が欠けていることの証拠とみている。

経済活動は各人の自由に任せることが望ましいというのがヒュームの繰り返えし主張するところであったが、これはかれが根本に自由な実践としての労働を把握したところにもとづいていることは、今や明らかであろう。

また自由な経済活動としてのインダストリーの発達に人民の政治的自由の基礎であること、をヒュームは正しく認識した。『奢侈が商工業をつちかうところでは、農民は土地の適切な工作によって富み、独立する。一方、商工業者は財産のわけまえを得、社会の自由の一ばん良くまた固い基礎である中産階級に権威と声望とをひきよせる』²⁷⁾と。また『イギリスの下院は、われわれ人民による政治を支えるものであり、全世界の認めるように、その影響力と重要性の主なるものは、民衆の手に財産のこのようなバランスをもたらした商工業の増大に負うものである』²⁸⁾と。

以上の諸点は、繰り返えすまでもなくヒューム

27), 28) "Of refinements in the arts", in Vol. III, p. 304.

の諸著作を通じて、一貫して追求された主題ではなかったし、大著『イギリス史』の叙述の主要な論点を形造るものではなかった。しかし『イギリス史』のなかでこれらを取りあつかった4つの短い付録こそ、のちにスコットランド歴史学派の論者たちによって発展せしめられたのである。たとえば、アダム・ファーガソン(Adam Ferguson)の『市民社会史論』は、ヒュームの短い付録を、その叙述の主要内容としているのである。この意味でヒュームは、スコットランド歴史学派の先駆者、または問題提起者の地位をしめるのである。

『諸国民の富』の著者はインダストリーの発展と政治的自由の関連について、これらは最もすぐれて商業の結果であると考え、そして『わたしが知るかぎりでは従来このことに注目を払ったのはヒューム氏だけである』²⁹⁾と述べ、その負うところを明らかにしている。しかしヒュームの古典派経済学の成立に果たした役割は以上のことにのみつきるとは思われない。

ヒュームの自由な実践としての労働とその社会性の把握は『諸国民の富』と重要な関連をもっていたように思われる。スミスが『諸国民の富』において労働を単に物質的労働に限定せず、『かれ自身の境遇を改善しようとする各人に共通する努力』として把握し、それを自然的自由の制度の基礎においている点に、ヒュームの大きな影響をみることができよう。また、ヒュームの労働の社会性の把握は、スミスにおいて『一物を他物と取引し、交易し交換する人類自然の性向』として捉えられ、労働と交換性向こそ『いっさいの人間に共通で、しかも他のどのような動物類においてもみいだすことのできない』³⁰⁾とされ、人間社会の進歩の現実的基礎と考えられている点に、ヒュームをふくむスコットランド歴史学派と古典派経済学の成立との重要な関連をみることができないであろうか。

29) A. Smith, *Wealth of Nations*. Cannan's ed., London 1950. Vol. I, p. 383, 大内兵衛・松川七郎共訳『諸国民の富』第二分冊 476 ページ。

30) Smith, *ibid.*, Vol. 1, p. 15. 邦訳第1分冊 116 ページ。